

ガネフォ50周年記念誌を読んで

房野 康滋 (73歳)

(日本大学出身)

まさに皆様の記憶には驚嘆です。私など頭に残っている記憶をかいまつんで書きましたがあんな程度。読んでいてガネフォと言う出来事のイメージが今になって、もっと大きくグローバルにまとまってくれたと思っています。今さらガネフォ記憶の総まとめ——でもないでしょうがそんな気持になりますね。特にゼロから実現に至るまで心労された方々には敬意を表します。ガネフォ会の誇りです。そんな方々のお蔭でやはりガネフォ会も50年も続いている、と言うのも偶然ではないでしょう。今後とも益々よろしくお願い致します。あれだけ重要な政治的背景がありながら、何故体協全てがレスリングの八田会長のような豪胆な態度で対処してくれなかったのだろうという思いは、残念ながらさらに大きくなりますね。

記憶と言う物は全く自己中心的なもので同じ出来事でも全然覚えている事が違いますね。酒井君のインドネシア戦での記事では、決まったと思ったバックシュートがキーパーの顔面に当り得点にならなかったと言う事をいつも残念な思い出として思いだす、との事。私は私で2点目の失敗が、ガネフォ記憶の筆頭です。相手のロングパスがポイントゲッターに届いた瞬間、私は 取れる！と判断して飛出しましたが失敗。ポンとはねられ得点されました。あの選手（オランダ系）の手の長さを頭に入れてなかったのがいけなかった。わずか数センチの事だったのに——。酒井君の記事を お互い様 という気持で微笑みながら読みました。

インドネシア戦の事をさらに私なりにまとめてみますとあの試合は社交試合だったと思っています。まずインドネシア戦に同国人の審判が笛を吹くと言うのがおかしい。我がチームは攻撃なんて全く出来ず、相手にただしがみつかれて身動きも出来ない。審判はそれを全て黙認するのですからたまったものではない。話にならない。私も一度反則の合間にゴールポストを放棄して、泳いで審判の居る所まで行きあまりにもひどいやり方に抗議しましたが、審判は半ばおびえているように見受けられた。ただ、ARE YOU CAPTAIN? と繰り返すのみ。これじゃダメだと仕方なく引下がりましたが、インドネシアチームに勝ってほしいと言う周りのプレッシャーを強く感じました。終わった瞬間これでいいんだ と思わず思いました。

インドネシア選手も水から出て来て、全身の力を込めて勝った喜びを両手を挙げて天に向って叫んでいました。私達とは全く違った大きなプレッシャーをかけられていた事は一目瞭然。これで全てが丸く収まったとでも言うべきだったのでしょう。ですから私は自分の失敗はさておき負けても残念とは思いませんでした。酒井君のバックシュートが決まり、私のミスが無かったら一体どうなっていた事でしょう?? 社交試合はあれで良かったんです。

インドネシア遠征が私に与えた将来の影響について：

そうですね。1961年にソフィアでのユニバーシアードに参加。1963年にインドネシア遠征。この2回で日本を出る事に何の違和感も持たなくなりました。そして、1965年の夏に故桑原重治君と迷う事など全くなくヨーロッパ目がけて日本を飛出しました。最悪の場合は貨物船で皿洗いしながら帰国すればいい、なんて荒っぽいしかも真剣な計画で。インドネシア遠征経験もそれを決断する大きな精神土台になってくれていたものと思います。私の人生の大きな土台となってくれたのですね。

村上(本郷)さんからガネフォの初版文集が頂いた後、さらに山本健様からのメール記事を拝読させて頂き、ますます事の奥深い底辺の広い事であったと痛感。この記事も文集に張付けて保存しました。そして、このままでは何か勿体無い、もう少し何か付加える事が出来ればもっといい物が出来るのでは? と言う思いで居りました。が、そんな大仕事はもう無理と思っている所に、村上(本郷)さんから 改訂版を との連絡があり嬉しく思いました。

私としては、読后感想記事、追加記憶記事、ぐらいのことしか出来ませんが皆々様よろしくお願ひ致します。

ガネフォと言ってももう誰も知らないのが当たり前でしょうが、6年後の東京五輪を機会にこのことが日の目を見てもおかしくないだろうと思っています。



1983年(昭和58年)8月 帰国歓迎会にて